

長谷川慶太郎著「千載一遇の大チャンス」講談社インターナショナル 2008年12月29日刊

## 日本の先進性を考える

1. 戦後の日本が急速な経済成長に成功し、同時に日本国民に世界一の長寿を提供できたのは、日本が戦後の半世紀以上、一度も戦争したことのない「平和国家」だったおかげである。昭和憲法の特徴とも言うべき「九条」のもたらした成果である。
2. 21世紀に入って、世界全体が「非戦」、長期にわたる「平和持続」の時代を迎え、世界中が「日本を見倣う」時代が到来した。遂にその日が到来したのを見て、あらためて強い感慨を覚えずに置かない。
3. 考えてみれば、第二次大戦に完敗した日本は、戦勝国、米国の単独占領下に入り、その強い影響を受けて、第二次大戦の敗北に学んで「平和国家」を目指したわけだが、米国の「核」の庇護を受けたとは言え、みずからも大規模な再軍備の道を避けることに成功した。同じ敗戦国でも欧州のドイツでは、ほぼ同じ時期の再軍備でも、徴兵制、本格的な指揮官養成、装備の全面的な国産化と、日本を大幅に上回る再軍備方式を導入した。今日では欧州の覇権を放棄し、ただ一つ圧倒的な優位にあった経済面ですら、自国の覇権を欧州連合、「ユーロ」への統合という形でフランスと妥協する姿勢に変えて、欧州の内部秩序の安定を維持する路線を取らざるを得ない。逆に日本の場合は、「周辺のアジア」との孤立の路線を取っても、なんらの支障がない。文字どおり「さよならアジア」である。
4. 繰り返すが、日本は世界の流れを先取りしている。それを示す事実が、いかに多くあるか。これは決して偶然の産物ではない。戦後の日本の出発点が敗戦国だった上に、その教訓を真剣に学ぶ努力が国民全体にわたる規模で進められたため、いったん始まった「改革」が占領終結後も継続して、日本の社会構造を根底から変えた点をあげられよう。戦前と戦後とでは、日本国民の発想、社会生活の隅々に至るまで、変わったのである。たとえば、道路を渡る際、日本国民はたとえ車が来なくても、赤信号を守って、車道に入ることはほとんどない。東京など大都会は言うまでもなく、地方の田舎町でも同じである。戦前とは完全に一変した行動である。日本国民の「順法精神」の徹底ぶりは、他国民の旅行者に強い印象を与えている。

5. 世界経済全体に等しく襲い掛かってきた「金融危機」だが、その受ける「ダメージ」は国によって驚くべき「差」がある。日本はむしろ最も「ダメージ」が軽く、逆に大きい恩恵すら得られる、まさに千載一遇の好機にある。その現実を解明。日本の実力に自信を取り戻せ。

<コメント>

大変だ、大変だと嘆いているだけではなく、日本の強味を正確に認識し、その強味を極大化してこの大不況を乗り切ることが求められる。

－ 2009年1月4日林明夫記－